

1. セミナー・シリーズ 「東アジア関係学に向けて」

2014年6月・7月・12月
会場：名古屋大学大学院文学研究科1階 大会議室

【セミナーⅥ 2014年6月23日】
漂流民の言説～異文化経験にかんする《語り》の転生～
——『環海異聞』『船長日記』『朝鮮物語』をめぐって
講師：春名 徹(日本海事史学会理事、南島史学会評議員、
神奈川近代文学館(神奈川文学振興会)評議員)／司会：池内 敏(名古屋大学)

【セミナーⅦ 2014年7月25日】
中日の知の津梁——戦前上海内山書店の精神的遺産をめぐって
講師：秦 剛(北京外国語大学北京日本学研究中心副教授)／司会：飯田祐子(名古屋大学)

【セミナーⅧ 2014年12月8日】
情報とモノ——『制御と社会』補遺
講師：北野圭介(立命館大学映像学部教授)／司会：藤木秀朗(名古屋大学)



2. 国際シンポジウム 「表現の不自由—自主検閲とメディアの想像力—」

Unfreedom of Expression: Self-Censorship and Imagination in the Media

日時：2015年1月24日[土]・25日[日]
会場：名古屋大学文系総合館7階 カンファレンスホール *同時通訳：日本語-英語

Jan. 24 (Sat.)
セッション 1
牧義之(日本学術振興会特別研究員PD・中京大学)
「内閲」という措置——戦前・戦中期における言論の自己統制」
加藤厚子(横浜市立大学・非常勤講師)
「映画法体制下における作品統制」
韓萬洙(東国大学)
「『書けたこと』と『書きたかったこと』——植民地朝鮮における検閲・印刷資本・テキスト」
討議……………ディスカッサント：垣原智子(名古屋大学)
司会：池内敏(名古屋大学)
進行……………星野幸代(名古屋大学)

Jan. 25 (Sun.)
セッション 2
佐藤泉(青山学院大学)
「それを語る言葉が欠けている——教育、文学、内的検閲について」
レイチェル・ハッチンソン(デラウェア大学)
「教育としての検閲——映画の暴力とイデオロギー」
永田浩三(武蔵大学)
「今、日本で進行する『表現の不自由』——「慰安婦」・戦争・原発・植民地政策はなぜ差し障りがあるのか」
討議……………ディスカッサント：ネイスン・ホブソン(名古屋大学)
司会：藤木秀朗(名古屋大学)
全体討議……司会：飯田祐子(名古屋大学)
進行……………浮葉正親(名古屋大学)

ある《事件》について語ることがどのようにしてタブーになってしまうのか、メディア(文学、映画、テレビ、アート)はそうした《事件》とどのように向き合ってきたのか。

戦前から今日に至るまで、表現の自由を拘束する法的規制がさまざまに試みられ、また実施されてきた。戦前の日本では治安維持法、現代日本では特定秘密保護法案などがあり、こうした国家権力や法の規制力・強制力が働く領域で検閲制度もまた機能する。このように上から権力の網をかぶせられることに対して異議を申し立てることは、表現の自由を求める者であればごく自然な行為ではある。しかし、いまここで問おうとするのは、必ずしもそうした二項対立的な位相における問題群ではない。むしろ、人々やメディアが自主的に表現を自己規制するという事態を、われわれ自らがどのように考えてゆくべきか、の方である。

20世紀において、そうした自己規制にかかわる問題群は、日本だけでなく韓国／朝鮮・中国／台湾といった各地域にも具体例を見いだすことができるだろう。それは単に見いだされるだけでなく、時と所を変えながら類似の事態が繰り返されてきたようにも見える。差異性と共通性、およびそれらの背景に潜むものを剔り出すような把握を試みたい。

シンポジウムの一日目は概ね1945年以前の時期を扱うこととする。それは、日本による東アジア地域に対する侵略戦争と植民地支配の時期である。二日目は、1945年から現代に至るまでの時期を扱う。それは日本にあっては平和と民主主義の到来、東アジア地域にあっては圧政からの解放の時期として始まった。にもかかわらず、やがて1945年以前に見られたのと類似する状況が、東アジア各地に現出し始める。

How does speaking about 'an incident' become taboo? How has the media (literature, film, television, art) met and faced such incidents?

Since before the war to today, various legal restrictions constraining the freedom of expression have been attempted as well as implemented. Measures such as the pre-war Peace Preservation Law and the contemporary Specified Secrets Protection Bill are direct examples, and under state powers and their legal regulations and enforcement, censorship laws also come into operation. To resist to such restrictions is a natural act among those who seek freedom of expression. What we aim to question through our discussions, however, is not the problematics of such a dichotomy between restraint and resistance. Rather, we aim to consider the phenomena in which people and the media themselves regulate their own self-expressions.

Since the 20th century, these issues related to self-imposed regulations have manifested themselves in instances across not only Japan but also South Korea, North Korea, China, and Taiwan. In fact, these manifestations have not been particular instances, but rather similar instances repeating themselves across time and space. Differences and commonalities, as well as the elements that lurk within their backgrounds—such are the elements that we attempt here to bring into relief.

The first day of the symposium deals mainly with the pre-1945 period, the period of Japan's war of aggression and colonial rule in East Asia. The second day deals with the period from 1945 until the present, a period that began, theoretically, with the arrival of peace and democracy in Japan and the release from Japanese oppression for broader East Asia. Nonetheless, conditions similar to those seen before 1945 have begun to surface in various parts of the region.

